

# Summer monitoring program for young scientists in Kiso River

## 若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曾川

奥田 昇

当センターの共同利用・共同研究拠点事業による国際ワークショップが、DIWPA、JaLTER、京都大学理学部の共催により実施されました。本ワークショップは、地球規模の気候変動、森林伐採、河川改修などの人為攪乱に伴う森林溪流生態系の環境変化が河川生物群集に及ぼす影響を評価する長期生態系観測およびデータベース作成・公開を目的としたプログラムです。特に、若手研究者の主体的参加を通じて、大規模長期研究プロジェクトを牽引する次世代のリーダーを育成することを目指しています。



- ◎開催日  
2014年8月9日(土)～8月16日(土)
- ◎開催地  
京都大学理学部附属木曾生物学研究所  
(長野県木曾町)
- ◎講師  
奥田昇・中野伸一・陀安一郎(京大大学生態学研究センター)
- ◎講師  
藤永承平・岡野淳一(京大大学生態学研究センター)
- ◎参加者  
京都大学・理学部・3回生(2名)、金沢大学・環日本海域環境研究センター・特任助教、オタゴ大学・研究員(ニュージーランド)、ラグナ湖開発局・研究助手(フィリピン)、アジア太平洋地球環境変動研究ネットワーク・プログラムフェロー(フィリピン)計11名

◎観測結果 <http://goo.gl/z7DyGi>

◎個人研究レポート <http://goo.gl/mFVR53>

今回で2回目となる国際ワークショップ形式でのプログラムには、DIWPA(西太平洋・アジア地域生物多様性研究ネットワーク)を通じて、海外から3名の応募がありました。フィリピンから2名、ニュージーランドから1名が参加し、国際色豊かなワークショップとなりました。



写真1. 黒川での生物採集調査

プログラムの前半では、河川生態学の基礎および河川生態系の標準的な調査手法を学び、観測調査からデータベース作成まで一連の作業に参加者全員で取り組みました。調査は、JaLTERサイトとして登録されている木曾川支流河川の黒川および赤塩沢で実施しました。河川の物理・化学環境計測に始まり、礫付着藻類や底生無脊椎動物の定量採集(写真1)、そして、実験室ではクロロフィル分析や底生動物の選別・同定作業をおこないました(写真2)。観測結果に基づいてグループ討論を行った後(写真3)、参加者各自が個人研究を実施しました。

調査から遡ること1か月、木曾川は台風被害に見舞われました。その影響か、いつもなら川面を賑わす魚の姿がさっぱり見られませんでした。ワークショップの初日、生態研から木曾川に向かう私たちの後を追うように次なる台風が接近し、さらに、低気圧に誘引された秋雨前線が流域に長期停滞したため、雨に始まり雨に終わるワークショップとなりました。せめてもの救いは、台風一過より一足早く生態系観測調査を完了できたことでしょうか。増水により野外調査に制約が課された状況下でも、安全管理に配慮しながら各自が創意工夫して研究を立案し、興味深い成果を得たことが印象的でした。



写真2. 実験室内にて底生動物の同定作業

さて、本ワークショップのもう1つの狙いは、地域の自然に根ざした伝統文化を体験することにあります。手打ち蕎麦や地酒に舌鼓を打ち、露天風呂や盆踊りに興じる頃には、言葉の壁もすっかり取り払われ、参加者の絆の

深まりを実感できました。数十年後、彼らが大規模長期研究を牽引するリーダーとなれば、望外の喜びです。



写真3. 観測データの検討会

本ワークショップによる観測調査結果および個人研究レポートは、上記のURLより閲覧可能です。調査データおよび定量採集生物標本は、共同利用申請を通じて、その研究目的および意義が適当と判断された場合に利用することが可能です。

謝辞

一部の海外参加者の招聘旅費は、総合地球環境学研究所の予備研究「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会-生態システムの健全性」により支援されました。



おくた のぼる

京大大学生態学研究センター・准教授。専門は、水域生態学。